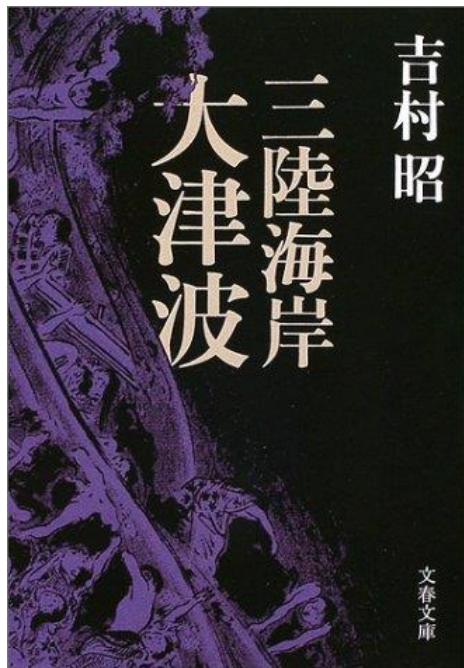


タイトル「三陸海岸大津波」(全 115 ページ)

出版社：文春文庫

1970 年 7 月 原題「海の壁―三陸沿岸大津波」＜中公新書 224＞

1984 年 8 月 中公文庫「三陸海岸大津波」



著者：吉村 昭

1927 年、東京生まれ。学習院大学中退。1966 年「星への旅」で太宰治賞を受賞。以降、「戦艦武蔵」、「零式戦闘機」、「陸奥爆沈」、「総員起シ」等を発表後、1973 年菊池寛賞を受賞。1979 年「ふぉん・しいほるとの娘」で吉川英治文学賞、1994 年「天狗争乱」で大佛次郎賞を受賞。2006 年 7 月 31 日永眠。

紹介

当書は、三陸海岸で起きた大津波災害の記録を、当書を発行する 1970 年の前の 5～10 年の間に三陸海岸で現地の人々に、著者吉村昭氏が直接取材して得た情報を中心に、種々の史実も調査の上でまとめたものである。ということから、日本における津波災害の歴史を知ることができ、津波に関する知識を得たいと思う人たちにとって入門書となるし、中身を推敲すれば津波対策のバイブルともなりうる書籍である。取材対象とした津波が、明治 29 年の三陸大津波、昭和 8 年の三陸大津波、チリ地震津波の 3 つの津波で、大地震が起きた後の津

波、あまり強くない地震の後の津波、全く自覚のなかった地震（はるか太平洋の向こうで起きた）による津波と、全く異なる状況の異なる津波であって、更には津波が来る前に海水が引いた地域もあれば、そうでなかった地域もあり、津波対策の難しさを示唆している。そして、最も着目すべき点は、この本の初版が出されたのが 1970 年であり、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災のなんと 41 年前であったということで、これには重大な意味があると考ええる。つまり、このように東北を含む太平洋沿岸における大津波の過去の歴史を、例えば福島で原子力発電事業を推進していた人たちが結果として全く気に留めていなかったために、福島では極めて深刻な災害になってしまったことである。このことは極めて残念なことであり、日本の団体、基を正せば日本人の体質に起因する一大問題点と捉えられる。著者が当書に込めた情報をより深く汲み取れば、もし 2011 年以前に当書の情報を認知していたら発電所災害が防止できていたかもしれない可能性を知り、今後に生かすための方策を考えるのにも役立てられる。

本書のコアコンテンツ

まえがき

著者が三陸海岸を旅していた時に、或る婦人から、「津波に追われながらふとふりむいた時、二階家の屋根の上にそそり立つ波がのっと突き出ていた、それは深夜のことで波は黒々としていたが、その頂きは歯列をむき出したように水しぶきで白くみえた。」という体験談を聞いた。このことをきっかけに津波を調べ始めて、この書になった。

1. 明治 29 年の津波（1896 年）

（1）前兆

- ・ 著しい漁獲量の増加、まぐろ、鰯、カツオ、あわび、うなぎ等
- ・ 沖合に連日夜の青白い怪しげな火
- ・ 潮流の乱れ、井戸水の変色（白、赤）
- ・ 6 月 15 日の午前と午後に微弱な地震、午後 7～8 時台の 3 度の弱震
- ・ 沖合からドーンドーンという音響
- ・ 大小合計数十回の津波（世界史上第 2 位と言われる）、羅賀での津波高さ 40~50m

（2）被害

- ・ 岩手県死者 22,565 名、流失家屋 6,156 戸、宮城県死者 3,452 名、流失家屋 3,121 戸、青森県死者 343 名等々

（3）挿話、

- ・ 宮城県牡鹿郡女川村、雄勝村、本吉郡相川村、白浜村、唐桑村、志津川町の漁師

- ・ 岩手県気仙郡広田村、南閉伊郡釜石町、東閉伊郡船越村、田老村、北閉伊郡普代村
- (4) 余波、
- ・ 明治 29 年の津波は海底地震によるものと断定された。宮古測候所は、計 11 回の地震があったことをあきらかにしている。震源地は宮古測候所の東南方の東経 145 度、北緯 39 度の位置で、海底に発した陥没が原因と判定された。
 - ・ その余波は、函館、室蘭、茂寄（十勝地方）、千葉県銚子港、小笠原諸島、ハワイ諸島（カウアイ島に停泊中であったアメリカ商船ジェームス・マキー号）にまで及んだ。
- (5) 津波の歴史
- ・ 世界の津波の歴史をみると、「1755 年 11 月のリスボン大地震による大津波」、「1812 年フランスのマルセーユの津波」、「1883 年ジャバ島附近のクラカトウ島火山爆発による 36,000 名の犠牲者という世界最大惨事の津波」、「1958 年 7 月アラスカのリツヤ湾を襲った史上最高の津波（500m 高さまで達した）」が挙げられる。
 - ・ 日本を襲った津波としては、「1771 年 4 月 24 日の石垣島を襲った地震津波（島民 17,000 名中 8,500 名が犠牲）」、「1792 年島原で火山噴火に伴う津波（死者 15,000 名）」、「1854 年房総半島から九州にかけて大津波（死者は 3,000 名）」、「1923 年関東地方大地震による津波により相模湾沿岸で被害」、「1944 年、1946 年に南近畿地方で大津波（1,000 名、1300 名の死者）」が挙げられる。
 - ・ 日本の中でも三陸沿岸の津波の来襲履歴は多く、この明治 29 年の津波の前だけでも、著者が拾い上げたものは、869 年貞観大地震の津波から 1894 年の岩手県沿岸の小津波まで 18 件にも及ぶ。

2. 昭和 8 年の津波（1933 年）

- (1) 津波・海嘯・よだ、
- ・ 津波という言葉は、津（港）をおそう高波という意であり、新造語である。明治 29 年には海嘯（かいしょう；海が嘯く（うそぶく））という言葉が使われた。三陸沿岸特有の地方語が「よだ」である。よだは、地震もなく、海面がふくれ上って、のっこ、のっこ、のっこ海水がやって来るものを指すと言う人もいるが、津波と同義語と思う。
- (2) 波高、
- ・ 昭和 8 年の津波後、中央气象台技師国富信一氏は津波の高さを測る三種の方法を定義している。
 - ・ 第一の方法：海中に設置された験潮儀による方法。津波は海岸に達した時の高まりを測定できないので、不適當である。
 - ・ 第二の方法：津波来襲後の打ち上げられた残留している物体により測定する方法。大きな波やゆっくりとした津波に対しては正確に測定できるが、津波が急にせり上がって海岸で一斉にぐだけて村落の上から落下したような場合には正しくない。
 - ・ 第三の方法：海水が陸地に侵入した地域を海面と比較して津波の高さをはかる方法。平

坦な土地と背後に山を背負うような場所では、大きな差があり、特に海岸に河口がある場合は、津波が川筋をさかのぼるので、大変な数字になってしまうことがあり、正しくない。

- ・ このように三つの方法ともそれぞれに不備な性格を持っているが、それは津波の多様性をしめすもので、今までは三つの方法を総合勘案してはじきだされている。
- ・ 明治 29 年の岩手県下閉伊郡田野畑村羅賀の津波高さは 22.9m とされているが、羅賀に住む中村丹蔵氏の家は、海面から 50m はあるにも拘らず、津波が激しい勢いで襲われたことも事実である。

(3) 前兆、

- ・ 昭和 8 年 3 月 3 日午前 2 時 32 分に強烈な地震が起こった。震源地は、明治 29 年の大津波時と同じ岩手県釜石町東方約 200m の海底であった。
- ・ その他の前兆としては、井戸水の減少、濁水又は混濁
- ・ 著しい漁獲量の増加、鰯、あわび等
- ・ 発光現象
- ・ 沖合からドーンドーンという音響

(4) 来襲

- ・ 強震は 5～10 分続いたので、人々は家を飛び出したが、その後、零下 10 度近い寒さと、当時三陸沿岸の住民は「冬季と晴天の日には津波の来襲がない」という言い伝えを信じていたため、ほとんどの人は家に戻って再び眠ってしまった。
- ・ その間、海水は大きく干き始め、沖合で盛り上がった後、津波となって海岸を襲った。その回数は 3 回から 6 回にも登り、津波による圧殺、ひきさらわれ、寒さによる凍死等の被害が出た。
- ・ 被害は、岩手県が最大で、岩手、宮城、青森の三県の被害を合計すると、死者 2,995 名、流失家屋 4,885 戸等であった。

(5) 田老と津波

- ・ 岩手県下閉伊郡田老村の被害は最も悲惨をきわめた。
- ・ 明治 29 年の大津波の時に田老村にある四字（あざ）のうち、海岸にある田老、乙部の全戸数 336 戸がすべて流出して全滅している。陸上の人間は 1,859 名が死亡し、生き残れたのはわずか 36 名であった。その時に沖合 8 km の海面にマグロ漁に出ていた 60 名の村民がいたが、津波の轟音を聞いて海岸に戻ろうとしたが、3 度の大激浪に遭遇し戻ることができず、夜明けになって悲惨な光景を見ることになってしまった。
- ・ その災害から 37 年後の昭和 8 年に、又津波の猛威に遭ってしまった。田老と乙部はわずかに数戸の民家と高地にある役場、学校、寺院を残すだけで、村落すべてが流出していた。死者 911 名、流出人家 428 戸であった。
- ・ 次いで被害が甚大であったのは、岩手県気仙郡唐丹村本郷と下閉伊郡小本村小本（おもと）であった。

(6) 住民

- ・ 昭和 8 年の大津波を経験した人の記録が多く残されている。岩手県気仙郡唐丹村本郷 鈴木善一氏、他 1 名、阿部亀太郎氏、種市村川尻 出石正武氏、九戸郡種市村八木 石橋三七郎氏、柿崎貞氏、種市村宿戸 上岡谷たま氏などである。

(7) 子供の目

- ・ 田老村の尋常高等小学校生徒の作文が残っている。それは、子供の無心な眼に映った津波だが、それだけに生々しいものがある。尋二 佐藤トミさん、尋三 大沢ウメさん、尋三 川戸キチさん、尋四 山本栄悦さん、尋五 前沢盛治さん、尋六 牧野アイさん、高二 赤沼とし子さんなどである。
- ・ 牧野アイさんはこの津波で独りぼっちになり、宮古や根室の親戚の家を転々とした後、田老に戻って、同じ境遇の荒谷功二氏（教員）と結婚して田老に住んでいる。（取材時でも）地震があると、子供を背負い山へと逃げる。それは豪雨であろうと雪の深夜でも同じで、「それは普通のことになっている。」と言っている。

(8) 救援

- ・ 被災当日とその後数日は三陸地方は零下 7.8 度前後という厳しい寒さであった。岩手県では警察部が地震を感知した直後に登庁し状況把握に努め、津波災害情報に受けると非常招集命令を発した。午前 4 時に石黒英彦知事が登庁し緊急会議が行われ、その後の午前 4 時 30 分に罹災地以外の県内警察に非常招集命令が出て、体制が整った午前 6 時頃、三陸海岸に近い山間部の岩泉警察署から緊急要請が入り、非常警備司令部から出動命令が発せられ、その最終出動が 7 時 35 分という機敏さであった。
- ・ 又、陸軍は派遣部隊を送り、海軍は霞ヶ浦海軍航空隊は偵察機を送り救援が近いことを住民に察せさせ、大湊要港部や横須賀鎮守府から駆逐艦などを派遣し、救援物資を届ける等を行った。天皇は侍従大金益次郎を特使として被災地に派遣し、慰問に当たらせると共に御下賜金を贈った。その他、中央各省や衆議院、貴族院も救済の活動を行い、民間からの寄付や新聞社の活動なども行われた。
- ・ 住居については、急造バラックが建てられ被災者は移り住んだ。家屋を失った人には個人用住宅も次々と建設されていったが、津波被害を再び受けることがないように高所に建てるように要請された。津波に対しては高所に居住するのが最善の方法であることは明治 29 年の大津の時から知られていて高所への移転が目立ち、この昭和 8 年の大津波の後はこの傾向は増した。しかし、年月がたち津波の記憶がうすれるにつれて逆もどりする傾向があった。つまり稀にしかやってこない津波のために日常生活を犠牲にはできないと考えるものが多かったのだ。
- ・ 明治 29 年の大津波後、昭和 8 年まで、これといった津波災害防止方法はとられていなかった。そうした反省もあって、住宅問題以外に、防潮堤、防潮林、安全地帯への避難路等の新設が企てられ、その他災害防止の趣旨を徹底するため、県庁から、「地震津波の心得」というパンフレットが一般に配布された。それにはまず津波を予知する必要が

説かれている。1. 緩慢な長い大揺れの地震があったら、…とかで、避難方法として、
1. 家財に目もくれず、高い所へ身一つでのがれよ。とかである。

また被災地各町村では、その後、独自に津波来襲を仮想した避難演習がひんぱんにおこなわれるようになった。警鐘を打ち、住民は高台へと一斉に走る。それらの訓練では、津波の悲惨な記憶も生々しいので人々の顔には真剣な表情があふれていた。

- ・ なお、三陸津波の余波は、南は高知県から北は北海道まで太平洋沿岸全域にわたり、静岡県清水、横浜、銚子等では、顕著な津波が記録された。（紹介者コメント：福島は記録がなかったのだろうか？）

3. チリ地震津波

（1） のっこ、のっこことやって来た、

昭和 35 年（1960 年）5 月 23 日午前 4 時 15 分、気象庁は、南米チリの大地震（4 度目の極めて激しい）を観測した。その地震によって起こった津波が、太平洋上に広がり、23 日午後 8 時 50 頃にハワイの海岸に襲来、60 名の死者を出したことも承知していた。しかし、気象庁では、チリ地震による津波が日本の太平洋沿岸に来襲するとは考えず、津波警報は発令しなかった。

5 月 24 日午前 3 時頃、夜間のハモ漁に出ていた大船渡市の漁師が、海面の異様な現象として、潮の流れが急に早くなって、船が沖の方へひかれはじめ、しばらくすると上げ潮になって岸の方へ強くひっぱられるのを感じた。そのうちに潮はさらに激しく干いて、漁師たちは、はっきりと異変が起こったことを察して、海岸沿いの家の者に向かって、「津波だ、津波だ」と叫んで、自分たちは沖に避難した。この時、岩手県下の死者は 61 名、大船渡市では 52 名という被害であった。

同日、潮の異常を目にした人は多かったが、かれらは単なる高潮と判断し恐るべき津波とは想像もしなかった。その理由は、簡単で、地震がなかったからである。

午前 4 時 20 分頃、不気味な引き潮が急速に増して、海底が露出し、湾は広い干潟と化していった。市民は消防団に報告し、各地で津波襲来を告げるサイレンが鳴りひびいた。しかし市民の反応は薄く、サイレンの音も魚の水揚げの合図か、どこかの火事かと思っただけだった。

- ・ その津波の寄せ方も明治 29 年、昭和 8 年の津波と全く異なっていた。或る漁師は「海水がふくれ上がって、のっこ、のっこことやって来た。」と言った。つまり津波は、高々とそびえ立って突き進んでくるものではなく、海面がふくれ上がってゆっくりと襲来したものであった。

（2） 予知

- ・ チリ地震による津波は、約 22 時間 30 分を要して太平洋を越え、三陸沿岸に到達した。太平洋をはさんで南米と日本は向かい合った場所にあり、ことに三陸沿岸は、チリ沿岸

の湾曲線からはじき出された波動を最もよく受けるところに位置している。

そのようにはるか遠くはなれた地域の地震による津波の来襲が過去になかったわけではなかった。元宮古測候所長二宮三郎氏の過去 380 年間に起こった大小 43 例の津波を調査した結果、5 例は間違いなく南米の地震によると、他に 4 例もその可能性が高いと判断された。

- ・ このチリ地震による津波は、22 時間 30 分という時価的余裕があり、ハワイでは死者が出るような津波を襲っていたので、当然日本でも津波の来襲があると予測するのが常識であったにちがいない。にもかかわらず、積極的な事前警告を行わなかった気象庁は、世の批判を受けてもやむを得なかったのだ。

(3) 津波との闘い

- ・ 津波は自然現象である。ということは、今後も果てしなく反復されることを意味している。
- ・ 明治 29 年、昭和 8 年、昭和 35 年と津波の被害度をたどってみると、そこには明らかな減少傾向がみられる。その理由は、住民の津波に対する認識が深まり、津波防止の施設がようやく海岸に備えはじめられてきたことも、その一因であることはたしかだろう。その模範的な例が、田老町に見られる。昭和 8 年の津波の翌年から海岸線に防潮堤の建設を始め、960 メートルの堤防となって出現した。さらに新堤防が起工され全長 1359 メートル、高さ最大 7.7 メートル（海面からの高さ 10.65 メートル）が完成し、その後改良されて全長 1345 メートルの長さとなった。この防潮堤の存在もあって、チリ津波の折には死者もなく家屋の被害もなかったのである。田老町では防潮堤の他に、避難道路も完成し、また避難所、防潮林、警報器などの設備も完備している。ことに町をあげての津波避難訓練は、毎年 3 月 3 日に、午前 2 時 31 分 39 秒（昭和 8 年の津波の発生日時・時刻に合わせて）に津波予告のサイレンの吹鳴によって開始されるという徹底したものである。昭和 43 年（1968 年）5 月 16 日の十勝沖地震の津波襲来に対しても、田老町は万全の態勢をとっていた。
- ・ 昭和 43 年の十勝沖地震津波等を経験した岩手県田野畑村の早野幸太郎氏（当時 87 歳）は「津波は、時世が変わってもなくなるらない。必ず今後も襲って来る。しかし、今の人たちは色々な方法で十分警戒しているから、死ぬ人はめったにないと思う」と言った。

紹介者後記

1970 年に当書の原著「海の壁―三陸沿岸大津波」が発刊されていて、その 41 年後の東日本大震災による大津波大災害が起きている。当書の最後は少し楽観的なニュアンスが表れているが、現実の東日本大震災大津波はそれを全く覆すような様相を呈したと考える。しかしそれは、吉田昭氏の所感が全く間違っていたということではなく、当時として津波対策が相当に進んできたことを捉えて極めて先進的な書になっていると評価するのが妥当であろう。当書から読み取れる事実を東日本大震災時の災害状況にも照らし合

わせて、現時点における最善の津波対策は何であるかを探ることが我々現代日本人に求められていると思う。